

ロナルド・サイム著

逸身喜一郎・小池和子・上野慎也・小林薫・兼利琢也・小池登訳

『ローマ革命』

——共和政の崩壊とアウグストゥスの新体制——

上、下

岩波書店 A5 各一〇〇〇〇円

上、二〇一三・九刊 四七六頁

下、二〇一三・一〇刊 四六二頁

本書は、二十世紀最大のローマ史学者の一人、Ronald Symeにより一九三九年に出版（初版）された『The Roman Revolution』の邦訳である（底本は第二版）。原著に付されている系図、索引、執政官一覧等の付録の訳出に加え、サイム自身による記載の誤りにも修正を付している。また、訳者解説においては、本書の内容のみならず、著者であるサイムについても簡潔ながら詳細な説明がなされる。本邦訳は訳書として以上のような特徴を備えている。

さて、本書が主題とするのは、副題に示されるように、共和政崩壊から「第一人者体制」の成立へ至るローマの政体と社会の変容である。そして、そのなかでアウグストゥスが如何に権力を掌握し、支配を確立したかを叙述の中心に据えている。

本書は三三章から構成されており、全体としては第二三章までの前半部とそれ以降の後半部に分けられる。

前半部では、本書の主題と叙述方法を述べた序説に続いて、ア

ウグストゥスによる「第一人者体制」の確立に至るまでの歴史が年代に従って語られる。共和政末期のポンペイユスとカエサルによる権力闘争、独裁官カエサルの支配と暗殺、その相続をめぐるアントーニウスとオクタウィアヌスの覇権争いが叙述の対象となる。

これを受けて、第二四章以降の後半部では、アウグストゥスにより確立された支配体制の特徴が描写される。アウグストゥスが築いた支配層の構成やこれを支えた仕組み、こうして構築された寡頭支配層の成員たちと統治の関わりについて、党派やパトロネジといった概念を用いながら論ずる。

サイムは、このような変容過程のなかで、共和政期に権力の中枢を占めたノービレスを中心とする旧来の寡頭支配層が没落したことを指摘する。その一方で、アウグストゥスによる新体制下では、イタリア諸都市や属州出身者、あるいは騎士階級の者たちによって新たな寡頭支配層が形成され、最終的にはローマに安定がもたらされたことを結論付ける。これが、サイムの論ずる「ローマ革命」である。

また本書は、とりわけローマ政治史の研究史において重要な価値を有する。サイムの叙述は、個々の人間、さらに、人間同士によって構築される様々な関係に注目すると同時に、いかなる統治形態の背後にも寡頭支配層が潜在しているという認識に依拠する。そしてローマの政治が、有力な個々の政治家たちを主軸としながらも、その友人・縁者や追隨者といった、いわば寡頭支配層を取り巻く人々をも取り込むかたちで展開されたという理解を提示す

る。

この点において本書は、テオドール・モムゼンを中心とする旧来の法制史研究に対して、いわゆるプロソポグラフィ―研究の観点から異論を呈した業績として今なお高く評価されている。そうした本書の重要性に鑑みるならば、本邦訳が有する意義もまた一層明白なものとなるだろう。

(内田康太)